

いつかはオーダーメイドのスーツを仕立ててみようと思っていた。それがサマになる年齢になったら。しかしいつかその年齢がやってくる。神戸・元町通り商店街にある柴田音吉洋服店でハタと気づいた。スーツがサマになるには、年齢よりどんなスーツを着るかによるのではないかと……。

幕末、いち早く海外へ門戸を開いた神戸には数々の西洋文化も上陸してきた。洋服もそのひとつだ。初代の音吉は1872年(明治5年)神戸で洋服店を開いていた英国人の下で、修業を始めた。11年間勤めた後、ついに日本人として初めての注文洋服店を元町3丁目に開く。維新聞もない頃、これからは洋服の時代と察知した慧眼には驚くばかり。その技術も卓越したもので、極上の生地をたつぷり使い、ていねいに仕立てられた洋服は、当時の著名人のステイタスでもあったといつ。

現在、4代目の音吉社長は服地の輸入を手がける一方、家業の仕立ても8人の職人を抱えて、昔な



Since 1883

# オーダーメイドの紳士服

お客様センター ☎0120-81-2431

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

20年連続 日本経済新聞

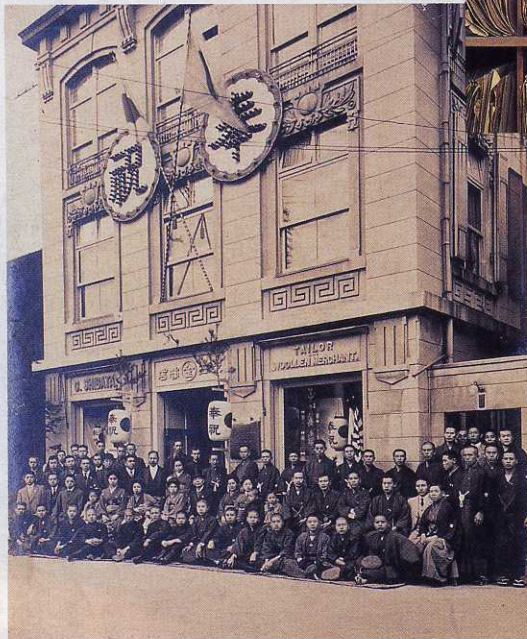
1869年(明治2年)  
イギリス人カベルが神戸に初の洋服店を開く。  
1872年(明治5年)  
初代・柴田音吉、カベルのもとで修業をはじめ。1883年(明治16年)  
元町3丁目に柴田音吉洋服店開業。日本人初の注文洋服店だった。  
鹿鳴館が落成し、洋装の男女が集まってパーティーを催す。  
1886年(明治19年)  
東京大学の制服がつめえり、ズボンに決められる。  
1925年(大正14年)  
モボ・モガの時代。  
1945年(昭和20年)  
既製服が登場しはじめる。  
1970年(昭和45年)  
機械縫製のイージーオーダー・スーツが流通しはじめる。

南部洋一 文  
text: Yoichi Nambu  
矢幡英文 写真  
photographer: Hiderumi Yawata

がらの方法をかたくなに守る。  
もちろんほんごんの部分が手縫い、英国では「スポークンテラー」というが、うちもその方法で……」Be Spoken、つまり初めてのお客さんとほじくり話しをする。世間話に始まり、仕事や趣味、ヘアスタイルや人柄まで見極めてから採寸、よつやん、こつこつスーツはどつでしよう、生地はこれ……」と話が進む。  
オーダーメイドとはかくあるものだったのか。既製服が簡単に手に入るようになったのは戦後のこと。それ以前はほとんどがオーダーメイドだった。だからだろうが、昔の人のスーツ姿がやけに決まっていたのは、体を洋服に合わせるのではなく、仕事や趣味、人柄までも考慮したうえで仕立てられた洋服、これなら年齢をまたよともピシッとは合ってくるはず……。■



現在、保管されている型紙は4000人分、なかには親子3代にわたるお客さんも



10年でようやく一人前、という職人の世界。ボタンホールももちろん手縫いだ。8人で月産30着が限度だという



古い写真はハイカラ好きの2代目が撮った明治末のもの。かつては明治天皇や伊藤博文の洋服も仕立てた



金のマークは明治から続くもの。  
\*人ニハシンボウガイチバンという意味だ、と